

2015年度名古屋大学学生論文コンテスト

佳作

なぜセンター試験は廃止されるのか 大学入試改革について

経済学部 牧野 恵美

1. はじめに

1.1 背景

1979年に始まった共通第1次学力試験から名称を変え、大学入試センター試験は1990年に始まった。今まで約25年もの間、私たちの入試制度は、大学入試センター試験と志望する大学の二次試験を受け、合否は合計得点で決まるというものであった。だが、今からおよそ1年前の2014年12月22日に、中央教育審議会は2020年度より大学入試センター試験を廃止し「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」を導入するとして大学入試改革案を下村文部科学相に答申した（中央教育審議会ウェブサイト）。

1.2 動機

「大学入試は一発勝負だ。だから体調管理はしっかり、当日の思いがけない事故にも気を付けるように」。私たちは高校時代このように言われ続けた。一般的に、事前にセンター試験の予想点数を見て、志望校を決める。だが、たまたまセンター試験当日、熱が下がらなかったり調子が乗らなかったり、センター試験の点数が思うように獲得できず、志望校を下げた友人が私の周りにも何人かいた。

また、部活で成績を残した者、発想力やコミュニケーション能力がある者、ボランティア活動など社会貢献を行った者など、人間的な魅力を有していた者が、やや学力が追い付かず志望校を落とした友人も数多くいた。人の一生を決めるかもしれないセンター試験がこのように一発勝負で多面的な選抜がされないままでよいのか。

さらに、私は実際に大学に入学して、高校の時の受験勉強で身につけた知識が大学で活かされていないのではないかと感じた。そして高校での受験勉強のあり方に疑問を抱いた。このようなことを思っていた中で大学入試改革が提言された。私はセンター試験とはどのような問題点があり、なぜ改革がなされるのかということを知りたいと思った。

1.3 大学入試改革の内容

現在の入試制度は、一発勝負の筆記試験のみという制約の中で1点でも多くの点数をとった者が合格できるというものである。1点少なかったことにより不合格になり、その大学に行けなくなる者もいれば、1点多かったことにより合格できる者もいる。

新しい入試制度改革では、一発勝負を避け、受験生をあらゆる方面から総合的に判断して合否を決めるものだとしている。その中身は(1)センター試験を廃止し、(2)大学入学希望者学力テストを年複数回実施し、(3)高等学校基礎学力テストを年複数回実施し、(4)大学の個別試験は筆記だけでなく小論文や面接、志望理由など様々な尺度で学生を評価するというものだ。

1.4 本稿の目的

①センター試験の一発勝負に付随して起こる問題は何か、②受験では受験生の総合的な判断がなされるべきではないか、③今の受験勉強に何の問題があって、大学入試制度を変えることで高大接続がどのようにうまくいくのか、という三点について主に説明し、センター試

験が廃止される理由を考察していきたい。

また、実際に現状では、センター試験廃止に反対の声は多い（図1）。このような中で、本当にこの改革はなすべきなのか。その他のアンケート調査においても、反対意見の方が多い。だが思うにそれは、センター試験の問題点や大学入試改革のねらいや意義、その内容を深く知らないだけではないかと私は思う。本稿では、グローバル化やデジタル化が進む中で、この政策を行うことで生じるメリット、デメリットを示し、この政策は総合的には日本の未来に必要なだということを示したい。

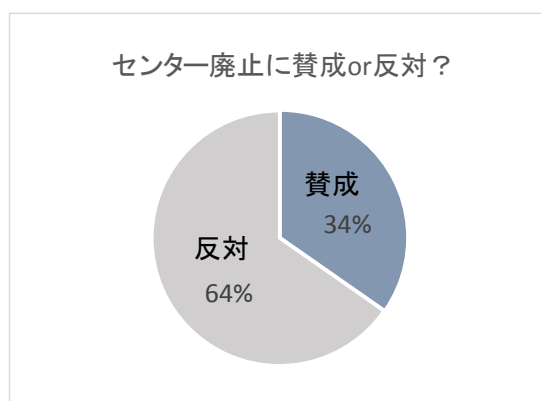


図1 あなたはセンター試験廃止に賛成？反対？

出典 教員ステーション ウェブサイト

2. 様々な大学入試試験

2.1 多様化する日本の大学入試制度

日本では戦後「受験地獄」といわれる状況が懸念されてきた。こういわれるのは日本が学歴社会であることと深く関係している。

この受験地獄を少しでも緩和するためにこれまで学力試験以外の方法が入試選抜に取り入れられてきた。天野（1998 p. 60）も「1980年代以降、大学入試制度の多様化の一環として、高校在学中の学業成績や活動記録を重視する推薦入学や面接、小論文、それにスポーツや文化・社会活動など、さまざまな評価方法で入学者を選抜する大学が増えている」と述べている。このように、最近になって突然、一発勝負の試験はいけないとわれ始めたのではなく、昔から少しずつ、入試の種類が足りない、ということが言われてきたのだ。

受験地獄を防ぐためにも、入試の方法が多岐にわたるのは良いことだ。実際にセンター試験だけでは、包括的な実力は測れないと考えたのか、最近では次々と新たな学校が入学志望者の能力や学習意欲、目的意識を総合的に判断するAO入試や推薦入試などの非学力選抜を用いている。例えば今、医学部の入学試験においては面接試験が課されるところが多い。将来の医者となる人には人柄も重要ということであろう。では弁護士はどうか、銀行員はどうか。すべての職業に人柄というものは必要だと考えられる。

大学入試改革は少しずつ変わってきた大学入試を区切りとしてきちんと見つめ直す良い機会だ。

2.2 米国の大学入試制度との比較

入試のしくみが、日本とアメリカとは全く異なっている。「学力を重視する日本と学力以外の面（適性や課外活動など）を考慮に入れた多元的な選抜基準を持つアメリカ」といった具合である（荻谷 2012 p. 211）。

アメリカの入試では主に、年に6回ほどあり、容易に受験することができるSAT(Scholastic Aptitude Test)やACT(American College Test program)を利用する。これらのテストの目的は「高校で得た知識を問うことではなく、大学の講義を受講するための能力を確認するものである」（細川 1998 p. 88-91）。高校での成績としては、全教科の平均点であるGPA(Grade Point Average)とクラスの中の順位の比例配分であるClass Rankを利用する。これらのデータの重み付けは大学によって異なり、それぞれ優秀な学生を判定するために研究した結果を利用している。「入学者の選抜は以上のデータを利用するのみであり、かなりの部分は機械的に選抜することが可能であり、実際にコンピュータが利用されている」（細川 1998 p. 88-91）。このようにアメリカでは実際に多様な入試制度が利用され、受験生を総合的に判断する準備が出来ている。日本でもアメリカのSATという適性テストに似た試験が、大学入試に加えられていた時期があった。「敗戦直後の8年間に「進学適性検査」の名称で実施されていたのである」（腰越 1993 p. 179）。

では、アメリカで長年適用されたこの政策がなぜ日本では受容されなかったのか。その理由は、そもそも進学適性検査は、従来の学力検査偏重の選抜に基づく弊害を除去することを目的として実施されたのであるが、その出題および結果の妥当性について十分な信頼が得られなかったことと、反面、進学適性検査のための準備が激しくなり、受験生にとって学力検査との二重負担となったことにより、「大学側、高等学校側のいずれからも廃止の要求が出された」（文部科学省）からだ。だが、今の時代は、この試験が必要であると再度認められ、この改革が生まれた。では、センター試験のデメリット、入試改革のメリットはなにか。

3. センター試験のデメリット

3.1 センター試験の一発勝負に付随して起こる問題

1つ目は、「目的の喪失つまり、大学に入学することがゴールになってしまう」ということだ。「大学が形だけのもの、そして商業的産物になってしまい、学歴のみのために大学に行き、大きな目標を持ってなくなっているのだ」（吉見 2011 pp. 4-5, pp. 222-223）。高校の学業よりも塾に通い、塾産業が日本では、異様なまでに発展した。高等学校の最後のまとめのテストとして、1回の本番の試験で点数を多くとれば、それで終わり。このような受験システムゆえに、大学へ何のために行くのか、「大学とは何か」ということが叫ばれるようになっている（吉見 2011 p. 2）。高等学校の教育をおろそかにしていても、最後で受験勉強を頑張れば、合格することができる。対してアメリカでの期待されない学生像とは「入学そのものが目的化している学生」だ。そのような学生は、入学後に伸びず、燃え尽き症候群に陥る可能性がある（冷泉 2014 p. 85-87）。だからこそ、アメリカの大学入試制度は一発試験にはしていない。今の日本の大学入試制度では、1回だけ頑張り、「偏差値の高い大学に入る」ことが目的となっている。これでは、大学に入ってから学生が怠けてしまう仕方のない環境では

ないか。

2つ目は、「一発勝負であることに付随して起こる問題にどう対処するのか」ということだ。「2010年には新型インフルエンザの流行が懸念され対応に苦慮した。2011年には、京都大学の前期日程入試中に入試問題の一部がインターネット掲示板に投稿されるという事件や、国立大学の後期日程試験の前日にあたる3月11日に東日本大震災が起きて多くの大学で通常の入試ができなくなるということが起こった」(佐々木 2012 p. i)。これらは、大学の入学試験が一発勝負である以上、取り返しのつかない大きな問題だ。

3つ目に、センター試験受験科目の任意選択では、出題の難易度をできるだけ均一にしなければ不公平だ。選択受験科目の難易差が合否に大きく影響することもある。そこで行われる、センター試験の得点調整は、一発勝負であることに付随して起こる問題への緊急処置だと考えてよい。だがもちろん確実なものではない。20点ほど以上ではないと行わないなど、あいまいで不平等が残る定義となっている。このようなことから、「1回きりの学力試験では、必ずしも適切な学力把握を実現しているのではない」(佐々木 2012 p. i)ということが言える。

3.2 受験生の総合的な判断と現在の日本で求められている能力

「センター試験にみられるような選択方式のテストは望ましくない」という意見が多い。記号だけでは測ることのできない能力があるということだ。

例えば、「理科離れ」という言葉がある。かつてアンケート調査を行った結果、実験の経験がないと解けないような問題や実験の解析や考察を要求するような問題、さらには実験そのものを問題にすることが求められていると判明した。今のセンター試験で測ることのできる理科の能力は限られているというのだ。科学的思考やセンスを問う問題が期待されている。マークシート方式をやめ入試問題を記述式にすることなどは、一般人対象のアンケートでも(毎日新聞 1997)示されている(問題は論述式にすべきが77%)。

(細川ほか 1997 pp. 181-182)

このように、1990年代からこのような問題は唱えられていたが、現在はもっと深刻であると考えられる。グローバル化が進み、今の日本で求められている職種の変化、そしてグローバル人材の需要が著しい。一般財団法人の日本経済団体連合会が行った「グローバル人材の育成・活用に向けて求められる取り組みに関するアンケート主要結果」という調査では、「309社中194社が、本社でのグローバル人材育成が海外事業展開のスピードに追いついていないとし、同じく309社中170社が、経営幹部層におけるグローバルに活躍できる人材不足と答えている。」以前のような、知識だけを学んだ頭でっかちの人材ばかりでは世界に太刀打ちできず、クリエイティブな、新しい考え方ができる人材ではないといけないのだ。つまり国際競争力の強化が求められているのだ。日本企業542社を対象とした「グローバル化に活躍する日本人材に求められる素質、知識・能力」の調査では「既成概念に捉われず、チャレンジ精神を持ち続けるが77.3%で第一位を占めた」(一般社団法人日本経済団体連合会ウェブ

サイト)。「グローバル人材には、社会人としての基礎的な能力に加え、臨機応変に対応できる能力が求められている」(稲葉 2012 p.20)。記号によるマーク形式のセンター試験でこのような能力は測れるだろうか。

3.3 大学入試制度を変えることで、高大接続がどのようにうまくいくのか

高大接続がきちんとなされているのかという問題がある。まず、高大接続という言葉は「学校制度の中での高校段階の教育と大学段階の教育の関係を指すものであり、たいていは大学入試のことを考える」(佐々木 2012 p. ii)。高校と大学の教育の架け橋をどうするかということである。今の日本では、大学で学ぶ内容と高校で学んでいることの食い違いが起きているということだ。

大学に入り、突然、レポートや論文が課題として出され、私たち大学生は、今までに学んだことのないスキルを求められ困った。「90年代以降論文やレポート作成のための参考書やマニュアル類の刊行が急増したのは、それらに頼らざるを得なくなった学生の実態を反映したものであろう」(島田 2012 p.174)。高校までの能力を上手く大学での学習に活かせるような教育を高校でする必要がある。高大接続がうまくいけば、前に述べた、大学でのやる気の消失という問題も解決できるかもしれない。センター試験を廃止することによって、高校の間に、今の時代にもっと必要とされている学習ができるということだ。

例えば、今の高校教育の実態を見てみると、学生は皆、良い大学に行きたくて勉強をするので、点数を取るために必死だ。つまり、効率よく点数を取ることが必要なものであって、論理的な力は必要ない。このようなことから、進学校では、第三学年の途中から、「主要」教科の授業が、大学入試センター試験を見据えた「演習形式」になっている。

1 時限の授業の前半でマークシートの問題を解き、後半で答え合わせと解説を行う。

このことは、大学を目指す高校三年生の言葉を学ぶ機会、世界の歴史を学ぶ機会、生命の仕組みを学ぶ機会が、そのような作業に置き換えられていることを意味する。

(島田 2012 p.178)

また、結果からわかったつもり、最初からわかったつもりになるというのがセンター試験対策なのだ。問題文を最後まで読まずに傍線部時点で読解をやめ、該当する設問を解くという方法はよく受験参考書に書いてあったし、センター演習の時はひたすら言われた覚えがある。また、国語のセンター試験問題で、適当なものを選べ。という問題がよく出されるが、西林(2005 p.206)は、「整合性のある解釈は、複数の存在が可能であり、唯一正しいという解釈は存在しない」としている。国語の解答一つ一つは、ある人の解釈だけでできているのである。

また、デジタル化によるスマートフォンの普及で、わからないことはすぐに答えだけを調べられる時代になっている。「受験勉強は学び方を学ぶことが重要だ」(児美川 2013 p.177)とあるが、今やその学び方を学ぶということですら、スマートフォンでできてしまう。というのが問題なのだ。自分で考えなくても、誰かが、答えだけを教えてくれるのだ。このまま

では、日本の受験生は考えることをやめてしまう。

一方、外国の大学入試では、「考える」ことを重視した問題が出されている。例えば、「あなたは自分を利口だと思いませんか?」「なぜ海には塩があるのですか?」「あなたは脳のどこが1番好きですか?」(ジョン・ファーンドン 2011 p.15-18, p.116-118, p.197-199) というものだ。日本には無い系統の問題だが、実際この問題が出されている大学では質の高い学生が集まっているのも事実だ。また、先に述べたように(2.2章参照)、アメリカでは、答えのない問題について考えるような大学の講義に対応できる能力を確認しているのだ。

実際に、多くの人が日本の学生の勉強法に疑問を抱いている。2003年、大学入試センターが全国の大学教員を対象に実施した学生の学力低下に関する意識調査では、突出して、「第一位、自主的・主体的に課題に取り組む意欲が低い、第二位論理的に思考し、表現する力が弱いが唱えられている」(島田 2012 p.173-174)。

4. 大学入試改革のメリット

まず、利点として、これまでに述べた、今の大学センター入試の大きなデメリットの解消が期待される。これまでは、1回の入学試験のことだけを考え、大学に入学することが目的となってしまうていた。だが大学入試改革により、高等学校の時期に大学へ行くための試験を定期的な受けることになり、大学と自分の本来の力を見つめなおす時間が増える。そうすれば個人が思う大学の価値が高まったり、大学に行く目的を想像できたりするようになるだろう。また、年複数回実施される試験により、一発試験でなくなるので、不正や病気、災害や事故により有能な人材が台無しになることもいくらか防ぐことができるだろう。また、今の日本で求められているような、頭を使って考えさせる、クリエイティブな問題の作成や面接も検討され、学生の総合的な評価による試験が行われることが期待される。

そしてさらにこのようなメリットがある。大学入試改革を行うことにより、今のAO入試制度のような試験がどの受験生にも課されることとなるだろう(入試によりAO入試は廃止される)。それは志望理由書を書く経験や面接の練習をすることで文章能力がついたり、自分と対峙したりできることにつながるのだ。

「志望理由書」では主に分量や内容が細かく指定され、比較的字数の少ない文章で書かなければならない。ここで重要なのは、出願にあたって、この書類の遂行・校正指導を受けている人の割合が、AO入試直後から50%を超え、今では、指導を受けずに出願することの方が珍しいということだ。今や、この書き方を指南する参考書やマニュアル、通信添削講座の類は巷に溢れている。よってそのようにして書いた先輩たちの「お手本」はどれも似たようなものとなる。

参考書や教師の指導を受けただけで合格をとるのはどうかといっているのではない。志望理由書では、(1)自己を理解する、(2)対象を理解する、(3)自己理解と対象理解とを往還して、関係づける。という作業を繰り返している。入試に志望理由書を課す大学は、「実は、受験生がこのような自己理解と他者理解の往還のプロセスを通じて自己と向かい合うという、「経験」を積むことを重んじているのではないか」(島田 2012 p.104-120)。入試改革の批判として、面接や、志望理由書の内容・構成が画一化されてしまい差を認めにくく、他者の強い介入や

マニュアルの存在を想起させるため、選抜の材料として有効に機能させるのが難しいという指摘があるが、そうではなく、このプロセスを生徒が行うことが重視されているのである。

現状では、自己認識や将来への展望は必ずしも明らかではなく大学教育が目指すものが自分にとってどのような意味を持つかを理解していない「受容型」の学生が多い(金子 2013 p. 21)。展望が見えていない今の大学生の現状を見ると高校の時に自分を見直す機会を持つことの重要性が、今の受容型の学生の増加から見受けられる。書くことが少なくなるのが明白なセンター試験の中で、この能力が培われるとは思えない。自己を見直し、表現する能力やコミュニケーション能力が身につくこの入試選抜はよいものではないか。自分と対峙する時間を高校の時に十分にもつことによって、大学での学習方法ややる気は大いに変わってくると予想される。

5. 問題点として予想されるものと解決案の提案

浪人生、年をとってからの入試は困難ではないかと言われている。だが新改革は TOEIC など多面的な評価を準備している、有料で試験をしに行くという手も考えることができる。

やはり 1 番は、このような大規模な試験を行うためには、人手と経費は大きな問題になるだろうということだ。センター試験は選抜における効率の良さは群を抜いている。マークシートによるコンピュータ採点だからこそ一度にかなりの数の受験生を選抜できるのではないか。面接試験などの人員はどうするのかという問題は残る。

解決策として、アメリカの例を用いることができる。「アメリカの大学入試では、その大学の卒業生各地の地元で、卒業生が面接をすることがある」(松井 2006 p. 6)。また先に述べたように(本稿 2.2 参照) GPA や Class Rank をデータ化しコンピュータを利用している。このような制度を日本でも取り入れればコストも小さくなるであろう。

6. 残された課題

主に 3 つの課題が残されている。まず 1 つ目は、定期的に大学入学希望者学力テストや高等学校基礎学力テストが行われることによって今よりも高校生のストレスがたまるだろうということだ。「ストレスの原因と考えられる学校生活場面に関する調査では、「進路や将来」65%、「勉強や成績」63%、「友だちとの関係」41%、「学校の先生との関係」30%、「家庭内のこと」23%、「家族との関係」23%であった」(岩淵 2011 p. 70)。このように多くの学生が、勉強がストレスになっている。一発勝負ということは、一回で受験を終えることができるということだ。この改革により定期的に「自分の将来に繋がっている」テストを受けることで、ストレスが増え不登校が増えたり、鬱になる学生がふえたりすることは容易に想像がつく。

2 つ目は、学力筆記試験と面接や小論文のどちらに重きを置くかということを考えなくてはならない。人柄や性格が重要になると言ったが、すべてがそう決められるわけではない。必要な学力をはかるために試験も重要だ。試験で点数を取ることができる人は努力できる人、根気のある人ということに結び付くという見解もある。点数配分については、各大学が求める人物像を考える必要があるだろう。

そして3つ目は、入試改革が行われると、大学入試に差別の問題が出てくることも予想される。ある大学のA0入試合格者上位の15校のうち9校は、課題研究やSSH指定校であった。(一般入試・推薦入試を含めた進学実績全体から見るとこれらの大学の進学実績は高くない。)ということがある。これは「都市部の受験生を結果的に優遇してしまう」ことにもなりうる。これらの問題にどう対処するかは考える必要がある(島田 2012 p.112)。また、「アメリカでかつて、主観的選択が入り込む余地のある入試へと移行が進んだ結果、ユダヤ人比率が40%から20%に激減し、その後ハーバード、プリンストン大学をはじめとする多くの有名私大にこの方法が広まったことがある」(ニコラス・レマン 2001 p.432-433)。日本も今新たに行おうとしている改革で個人的主観が介入し、教育の機会均等がくずれてしまう可能性も高い。面接試験や小論文の試験では、明確な点数をつけることが難しく、判断基準はやはりあいまいなことが多い。人が点数をつける以上、客観性の問題がでてくるということだ。「公正」が求められる大学入試において個人の判断や、偏見独断が介入してしまうことは許されない。基準がないものさしで学生の人柄をどう判断していくか、そして個人的主観の排除をどのように行うかということは今後の大きな課題である。面接項目や判定の正確性は、論議の的となるだろう。

7.最後に

センター試験は、一発勝負であるということやマークシート方式であるという性格から、様々なデメリットがある。入試制度改革により、それらのデメリットが解消されることを示した。受験生の総合的な判断がなされるようになることや、現在の日本で求められている能力を測ることができるようになるのは大きなメリットである。

入試制度改革への反対意見として「入試制度が変わってしまったら、今の高校教育の内容が生かせない」というものがあるが、そうではなく、これまで、今ある入試制度のせいで高校教育が世間の望みとは異なる方向に向かっていったのだ。そのように考えれば、入試制度を変えれば高校教育もまた、ためになるものに変わっていくのではないか。入試制度改革が受験勉強を含む高大接続をよりよくするきっかけになるはずだ。

大学入試改革によってどう日本の大学生が変わっていき、社会人になった学生がどのように日本を変えていくのか。グローバル化の世界の中で、国際競争力の強化のために大学入試を変えることの重大性、意義を考え、理解することは、日本の未来にとって必要不可欠だ。

参考文献

天野郁夫(1998)「日本の大学改革」『高等教育ジャーナル』第3号, pp. 58-64.

稲葉みどり(2012)「愛知教育大学におけるグローバル人材の育成の取り組み—タイからの招聘研究者を人的資源として—」『愛知教育大学教育創造開発機構紀要』vol.2, pp.19-27.

岩淵優子(2011)「高校生のストレスマネジメント教育に関する研究—環境の急激な変化や学校生活における不安やストレスへの適切な対応のために—」[online]. (URL http://www.cms-center.gr.fks.ed.jp/?action=common_download_main&upload_id=7793

最終アクセス 2016年3月10日)金子元久(2013)『大学の教育力—何を教え、学ぶか』

ちくま新書.

苅谷剛彦 (2012) 『アメリカの大学・ニッポンの大学』中公新書ラクレ.

腰越滋 (1993) 「進学適性検査の廃止と日本人の階層組織化の規範—適性か努力か—」『教育社会学研究』第52集, pp. 178-207.

児美川孝一郎 (2013) 『キャリア教育のウソ』ちくまプリマー新書.

佐々木隆生 (2012) 『大学入試の終焉 高大接続テストによる再生』北海道大学出版会.

島田康行 (2012) 『「書ける」大学生に育てる A0 入試現場からの提言』大修館書店.

ジョン・ファーンズ (2011) 『オックスフォード大学・ケンブリッジ大学の入試問題 あなたは自分を利口だと思いませんか?』河出書房新社.

ニコラス・レマン (2001) 『ビッグ・テスト アメリカの大学入試制度 知的エリート階級はいかにつくられたか』早川書房.

西林克彦 (2005) 『わかったつもり 読解力がつかない本当の原因』光文社.

細川敏幸・小野寺彰・山田大隆・鶴岡森昭 (1997) 「大学入試への意見 道内高校のアンケート調査から」『高等教育ジャーナル』第2号, pp. 180-184.

細川敏幸 (1998) 「米国の入試システム (速報)」『高等教育ジャーナル』第4号, pp. 88-94.

松井範惇 (2006) 「アメリカの大学教育システムは日本の大学に有効か」『大学教育』第3号, pp. 1-22.

冷泉彰彦 (2014) 『アイビーリーグの入り方』阪急コミュニケーションズ.

吉見俊哉 (2011) 『大学とは何か』岩波新書.

参考ウェブサイト

中央審議会ウェブサイト「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～ (答申)」(URL http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/tou shin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf 最終アクセス 2016年3月10日)

文部科学省ウェブサイト「高等教育機関入学者の選抜 新制大学下における入学者選抜制度」(URL http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317766.htm 最終アクセス 2016年3月10日)

一般社団法人日本経済団体連合会ウェブサイト「グローバル人材の育成・活用に向けて求められる取り組みに関するアンケート主要結果」p. 3 (URL https://www.keidanren.or.jp/p olicy/2015/028_honbun.pdf 最終アクセス 2016年3月10日).

教員ステーションウェブサイト「【アンケート結果】あなたはセンター試験廃止に賛成? 反対?」(URL <http://www.kyoushi.jp/entries/1779> 最終アクセス 2016年3月10日).